

とらうべ

先生と呼ばないで

松本信子

新生児訪問開業助産婦(東久留米市)

子育てのための約10年間のブランクの後、それまで存在さえも知らなかった日本助産婦会・東京都支部へ入会したのは16年ほど前でした。実際には、支部のずっと末端の地区会に入会したことになります。そこで一番ショックを感じたのは、ブランクの間の驚異的な医学の進歩ではなく、助産婦が互いに「先生」と呼び合っている、そのことでした。保健所の保健婦もまた、助産婦を「先生」と呼んでいるのを聞いて、この世界ではやってはいけない、すぐにでも退会したいと感じてしまいました。

それでも赤ちゃんと接することのできる仕事を捨てる決心がつかず今に至っています。その間、記憶にある限り一度も先生と呼ばず、母親ほどの年齢差のある大先輩にも、お名前前で呼ばせていただいていたきました。保健婦たちの変わり身は早く、彼女たちからの「先生」の声はあっという間に消えました。一度も話し合ったことはなかったのに生じたこの現象、やっぱり変だと感じていたんだな、と一人納得したのでした。

助産婦として出て行く場が広がっていくにつれ、「先生」の声は増々多くなり、都支部の会合では、先生コールが嵐のように感じられたものでした。多少の気おくれはありましたが、そこでも、どなたに対してもお名前前で呼ばせていただきました。「若造(でもないのですが)の癖になまいきだ」と間接的に聞いたこともありました。でも、やっぱり謹しんで、その忠告は無視させていただきました。

若い助産婦に尋ねたこともあります。「相手がそう呼ばれたいのならそれでもいいんじゃないの」という返事でした。そんなものかと思ったものの納得できませんでした。若い栄養士に「先生」と呼びかけられて、「あなたは病院の助産婦にも先生と呼んでいるのか」と尋ねると、答えは「NO」でした。「なぜ私を先生と呼ぶのか」との問いかけには、困った笑顔があっただけでした。その答えは分かっています。助産婦が先生と呼び

合っている中では、外部の人には先生以外の呼び方がないのだと、助産婦はそれぞれに活動の場を持ち、その状況の中で先生と呼ばれるのが当然の方が大勢いられることは知っていますが、助産婦の集う場で互いに先生と呼び合う習慣は、いつから始まったのでしょうか。

昨年の都支部の臨時総会の席で、入会15年目にして初めてこのことを言葉にして発言してみました。きっと同じ思いでいて下さる方がいると信じて、今後の助産婦会の発展のために、ヤングパワーの導入は不可欠で、そのためにも一度、言わなければならないと感じたからでした。結果ですか？ 私は急いでいません。長い間の習慣は一朝一夕に変わるものでもなく、私の考えが一人よがりなのか也正直言って分からないのです。それでも私は、今後も尊敬と愛と親しみを込めてお名前前で呼ばせていただくつもりです。そしてお願いしたいのです。どうぞ私を「先生」と呼ばないで下さいと。

